

本日の学び テーマ:「変わることを喜ぼう」 テキスト:フィリピ2章1-18節

【理解の手がかりとして】

この部分には、「キリストの体」と呼ばれる教会（神の家族）の関係性、その間になくしてはならない「心がけ」が教えられている。5節に「互いにこのことを心がけなさい」とある。それは、利己心や虚栄心から行動しないこと、へりくだること、相手を自分よりも優れた者だと考えて、相手のために注意を払うことである。

「言うは易く行うは難し」・・・そう、私たち人間は利己心や虚栄心を手放すことは難しい。その性質が日常生活の中に顔を出し、そして互いの関係を難しくしてしまう。しかしパウロは決して私たちに「自らの力で変わりなさい」と教えているのではない。1節で「あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら」と言っている。私たちの関係、「わたし」と「誰か」の間に「キリスト・イエス」という唯一無二のお方を置く時に、そのお方のご性質に感化され、自分が変革された「お互い」として出会う時に、そこに一致が生まれるのである。私たちは教会に集まり、共にキリストの十字架を見上げて礼拝する。そしてその十字架のもとでこそ私たちは「同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つに」（2:2）することが出来ると信じる。

6節以降の言葉は、パウロ以前の伝承にさかのぼる「キリスト讃歌」として有名。この讃歌は、神の子イエス様が神の身分であられながらも、私たちの所へ降ってきて下さったこと、私たち人間と全く同じ低さに身を置いて歩んで下さったことを歌っている。最も高きにおられてしかるべき神の子が「自分を無にして」、私たちの人間としての全て、罪、弱さ、痛み、に連帯されたというのである。

カール・バルトがこう述べている。「古えの画家が、・・・天の玉座に座すキリストから、十字架の傷を取り去られなかったことには意味がある」と。私たちを救い、天に昇られ、治めておられるイエス・キリストの手には釘の傷があり、体には鞭打たれた跡が残っている「傷だらけのキリスト」である。復活したキリストは無傷のキリストではない。トマスの前で、その指の釘跡や脇腹の刺し傷をお見せになられた。そう、私たちの主は「傷だらけのキリスト」、その愛の深さゆえに、傷を一身に引き受けられたキリストである。

私たちが集まる場所（教会）はその「傷だらけのキリスト」のもとである。十字架のもとである。その時私たちは心から自らを低くさせられないではいられない。何かしらの者でもなく、ただ罪人にすぎない「こんな私」を愛し抜いてくださったキリストに対する感動は、私たちの高ぶりを砕かずにはいられないのである。砕かれることは痛いこと。それまでの自分が大切にしてきた自尊心を切開するような痛みを伴う。しかし、その痛みの向こう側に、真実なる関係が新たに創造される、それこそが、キリストの十字架を掲げる教会の真骨頂と言えるのではないか。

パウロは12節で「だから、わたしの愛する者たち」と呼び掛けている。このパウロの「愛」はギリシャ語原典には「アガペ」という単語が使われている。アガペの愛、そう、それはキリスト・イエスに見られる愛のこと。イエス様が山上の説教の中で「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ 5:44）と言われた愛のことである。自分の利益でなく、他者に自分の命を与えるような生き方、それがアガペの愛であり、そしてパウロが実践しようとしている愛である。

15節の「よこしまな曲がった時代の中で」とか「世にあって」という言葉にあるように、キリスト者の

生き方は、決してこの世から切り離された、どこか別の世界の事柄ではない。信徒たちの生き様、そして教会の交わりの在り方が、「時代の中で」「世にあって」大変大きな意味を持ち、そして証しを為すのである。イエス様も弟子たちに言われた。「あなたがたは世の光である」(マタイ5:14)「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」(5:16)と。私たちが「世の光」であるのは、私たち自身がもともと「暗闇」であったのに、そして滅び行く命であったのに、その滅びへの道からキリストによって救い出されたからである。

証しする、このことが「星のように輝く」(2:15)ことだと言える。星の輝きにとって「喜び」は大切。パウロは喜んでいる。いつも喜んでいる。喜びは、不平や理屈とは反対のもの。喜びは感謝に溢れる。そしてその感謝と喜びは、周りを明るくする。

よく知られているように、星の光が私たちの目に届くには時差がある。地球から最も近い火星でも数分以上遅れているそう。海王星などは5時間以上遅れるとか。夜空の星の大半は、太陽系の惑星とは比べ物にならない程遠い恒星で、もっともっと実際よりは遅れて見えている。最も近いものでも、実際の姿の2年以上前の姿を見ていることになるとか。それになぞらえて言えば、私たちの「星」の務め、その輝きが伝わるには時間がかかる、ということ。パウロも「自分が走ったことが無駄ではなく、労苦したことが無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう」(2:16)と言っている。

パウロの宣教も、決して即効的な、人々の即座な信仰の実りを見たわけではなかった。苦労はつきものであり、忍耐に忍耐を重ねて、それでも希望を失わずに語り続けた。それでも喜び続けた、神の恵み、キリストにある救いの喜びを証しし続けたのである。私たちもまたその忍耐を学びたいと思う。そして私たちの祈りの先にある人々の救いを、そしてこの世界の救いについて祈り続け、証しし続けたいと思う。それは決して無駄にはならない。必ず届く、そう信じて、証しし続けよう。——「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」(ローマ5:3-4)。

【聖書教育より】

「キリストを証しする者でありたいと願いながらも、なかなか変わらない自分に失望することもあるかもしれませんが。自分の努力だけでなく、聖霊の関わりによって変えられるということを、…キリストを根拠とする者の変化はどのようなものでありうるのか、何に、どう変わるのか、話し合ってみましょう」(大人クラス)